

# 村上春樹「納屋を焼く」論

— 八〇年代繁栄に潜む光と影 —

高橋 龍夫

## 一 はじめに

「納屋を焼く」は、『新潮』一九八三年一月号に発表された村上春樹の短篇である。この号の目次には、開高健、大江健三郎、水上勉、辻邦生、津島祐子、遠藤周作、大庭みな子、大岡昇平などベテランの作家の作品が名を連ねているほか、井伏鱒二と安岡章太郎の対談や、江藤淳と三浦雅士の評論も掲載されており、新年号として編集サイドの力の入れようが伺われる。その中でも「納屋を焼く」は村上春樹の名前とともにタイトルが長方形のラインで囲まれているおり、とりわけ読者に注目させたい編集意図が見て取れる。当時、まだ新進作家の範疇にあった春樹自身も、こうした注目度の高い扱いを受ける新年号への執筆を意識したはずであり、この短篇には入念に取り組んだことが想像される。後に『村上春樹全作品1979～1989』第三卷（講談社 一九九〇・九）に収録する際に、「僕はときどきこういうものすごくひやとした小説を書いてみたくなる。この作品にはけっこう手を入れた。雰囲気は少し変わったかも知れない。」と述べている。「ものすごくひやとした小説」については最後に触れたいが、「作品にはけっこう手を入れた」という記述からも、春樹自身の「納屋を焼く」への強い思い入れが伺えよう。

本作については、山根由美恵が明確に整理しているように、従来の論考では「彼女」の失踪の解釈を中心に田中

実<sup>(3)</sup>、酒井英行<sup>(4)</sup>、川本三郎<sup>(5)</sup>の見解と加藤典洋<sup>(6)</sup>、平野芳信<sup>(7)</sup>、村上林造<sup>(8)</sup>の見解に二分される傾向にあった。それに対して山根は「同時存在の世界」に着目し、「複数の世界が同時に存在するという概念は、村上文学の中で重要な機能を有するものとなっている」として、春樹文学の特徴に接続させており、注目に値する。一方、西田谷洋はテキストの語りの構造に着目し納屋を焼くことをめぐる「僕」と「彼」との差異について「虚構世界の創出」の観点から論じ<sup>(9)</sup>、竹内理矢はウィリアム・フォークナー (William Cuthbert Faulkner) の「納屋を焼く」(「Barn Burning」一九三九)との周到な比較から母子関係の精神分析的な考察を行い「不毛な男女関係と都会人の孤絶を紡いだ」と論じており、いずれも「納屋を焼く」のアプローチとして有効な論点を提示している。だが、本稿では、先行研究において従来議論されて来なかったやや異なつた観点からのアプローチを試みたい。ただし、あくまでもテキストが読者に表象する可能性としての視座を提示する試論であることを予め断っておきたい。

その前に、「納屋を焼く」というタイトルについて確認しておく。春樹は自作について次のように述べている。

これは「納屋を焼く」ということばから思いついた小説である。もちろんフォークナーの短篇の題だが、当時の僕はあまり熱心なフォークナーのファンではなくて、この『納屋を焼く』という短篇を読んだこともなかったし、それがフォークナーの短篇の題であつたこと自体知らなかった。<sup>(1)</sup>

これに関して加藤典洋は、「納屋を焼く」の初出では「彼女」と「彼」を空港で待つ「僕」の「フォークナーの短篇集」を読むシーンが登場することから、春樹は「ほんとうのところは、知ってはいたが、読んでいなかった」と述べている。従来、「納屋は燃える」と訳されていたフォークナーの「Barn Burning」が、一九八一年一月に刊行された志村正雄訳(『フォークナー全集』第二十四巻 富山房)から「納屋を焼く」に改題されたことを踏まえての周到的な指摘である。ただし、本稿で後に「納屋を焼く」の作品内の時間構造を確認するように、「僕」が空港で「彼女」

と「彼」を待つのは一九八〇年の夏と推定され、その時点では、「フォークナーの短篇集」に収録される「Barn Burning」は「納屋は燃える」と訳されていた。春樹は、フォークナーの「Barn Burning」が従来、「納屋が燃える」と訳されていることを踏まえ、「Barn Burning」を自分なりに「納屋を焼く」と改訳してみても、その「納屋を焼く」ということばから思いついて自作のタイトルに用いたのではなかったか。それは、フォークナーへのオマージュであり、同時に自作によって「Barn Burning」のより適切な日本語訳を暗に示唆しようとするタイトルへのこだわりだったとも考えられる。ところが、初出発表後、既に二年前に刊行されたフォークナーの新全集で志村正雄が「納屋を焼く」と改題していることに気付き、「フォークナーの短篇の題であつたこと自体知らなかつた」(傍点、筆者)と弁解したのではないだろうか。

いずれにせよ、タイトルや改稿にこだわるほどの作品であるとすれば、なぜ春樹は本作でアルジェリアを登場させたのだろうか。本稿では、「彼女」がアルジェリアに行き「彼」と出会って帰国するよう設定されていることの意味について検討してみたい。従来、アルジェリアはたんなる旅行先として、「僕」が「東京のアルジェリア大使館に勤めている女の子を知っていたので、彼女に紹介した」ことを契機に「彼」との出会いの場としてのみ受け止められており、それ以上に考察を進める論は見あたらない。それゆえ、本稿における問題意識と着眼点の妥当性自体が問われることも危惧されるが、ここでは、春樹の一連の初期短編の再評価の契機にも繋がるのではないかという見通しのもと、あくまでも試論として分析してみたい。なお、本稿では、J. Philip Gabrielによる英訳「Barn burning」(『The New Yorker』一九九二・一一)にも用いられた改稿後のテキスト(『村上春樹全作品1979-1989』第三巻収録)をもとに論じていく。

## 二 作品の時間構造と登場人物の世代

最初にこの短篇の時間構造を確認しておきたい。

本作の初出の雑誌『新潮』掲載時が一九八三年一月であることから、当時の読者としては、結末で「僕」が一連の体験を回想している「十二月」は、掲載前年の一九八二年十二月と受け止めるのが自然であろう。したがって冒頭で「彼女と知り合った」「三年前のこと」とは一九七九年に当たり、「彼女」がアルジェリアに旅立つ「二年前の春」は一九八〇年の春となり、「彼」から△納屋を焼く▽話を聴くのも同じく一九八〇年の秋、そして「彼女」の不在を知る「昨年 of 十二月のなかば」は一九八一年の一二月中旬ということになる。つまり本作の時間構造は、一九七九年から一九八一年にかけての出来事を一九八二年の十二月に「僕」が回想している設定といえる。

ちなみに、一連の出来事は「僕」が三二歳から三三歳までに起こり、「僕」と関わった「彼女」が健在だったのは二〇歳から二一歳にかけてで、それらを回想する現在の「僕」は三四歳ということになる。

こうした時間軸を念頭に入れると、「僕」が「彼女」と月に二、三回会っていたのは一九七九年から八〇年にかけてとなるが、その際の「僕」と「彼女」の描写から、両者の立場の違いを整理しておきたい。

彼女と二人でいると、僕はのんびりと寛ぐことができた。やりたくもない仕事のことや、結論の出しようないつまらないごたごたや、わけのわからない人間が抱くわけのわからない思想のことなんかをさっぱり忘れ去ることができた。彼女にはなにかしらそういう能力があった。彼女の話す言葉にはとくに意味らしい意味はなかった。僕は相槌を打ちながらその内容をほとんど聞いていないこともあった。でも、それに耳を傾けていると、遠くを流れる雲を眺めている時のように、ぼんやりと心地良かった。

「彼女」と出会った三二歳時の「僕」は「込み入った感情」を抱き、「やりたくもない仕事のことや、結論の出しよ

うもないつまらないごたごたや、わけのわからない人間の抱くわけのわからない思想のこと」に拘泥せざるを得ない状況にあった。そして「彼女」ということでそういったことを「さっぱり忘れ去ることができた」と回想している。一方、「あけっぴろげで理屈のない単純さ」を備えた「彼女」は、「彼女の話す言葉にはとくに意味らしい意味はなかった」と語られている。ここで注意したいのは、一九七九年当時、二〇歳であった「彼女」に対し「僕」が三十一歳であることから、「彼女」と同年齢に当たる「僕」自身の二〇歳に遡ると、年代は一九六八年頃になることである。いうまでもなく一九六八年から一九六九年にかけては学費値上げ反対が引き金となり安保闘争やベトナム反戦などの波に高じた学生運動全盛の時期に当たる。「あけっぴろげで理屈のない単純さ」に支えられている二〇歳の「彼女」に対して、三〇代を迎えた「僕」は、まさに「込み入った感情」を抱えながら二〇代の青春を送らざるを得なかった世代に該当するのである。

村上春樹の小説の多くが一九六八、六九年頃の時代を基点としているのは周知の事実だが、本作でも三〇代の「僕」が「彼女」について「あけっぴろげで理屈のない単純さがある種の人々をひきつけた」と語るのは、たんに小説家である「僕」が三〇代になり仕事や雑務、人間関係等に煩うことが増えてきて一〇歳以上も年下の「彼女」の存在に安堵感を抱くだけではないと思われる。「ある種の人々をひきつけた」とあるように、一〇年以上離れている「彼女」と「僕」との間には世代的な差異の問題も介在しているのではないだろうか。特に、「僕」を煩わせる「結論の出しようもないつまらないごたごたや、わけのわからない人間の抱くわけのわからない思想のこと」とは、あえて抽象的な表現にとどまっているものの、一九六八年前後の学生運動の時代を経た世代に顕著な傾向とも考えられよう。三〇代になっても約一〇年前の学生運動の余波としての一連の活動や主義主張の検証、思想や組織の行方、人間関係の変化などが尾を引いていることを暗示する表現とも想像されるのである。

それに対して、一九七九年時点で二〇歳の「彼女」は、一〇年以上前の学生運動とは縁もなく、むしろ一九八〇年代に流行した「新人類」という言葉に該当するような、いわゆるノンポリ (nonpolitical) としての世代を代表している存在とも受け取れる。ちなみに「新人類」は、「従来にはなかった価値観や感じ方をもつ若い世代を、新しい人類になぞらえていった語」に加え、「大学紛争を知らない若者達を指していったもの」<sup>(13)</sup>とも定義されている。まさに二〇歳の「彼女」は「大学紛争を知らない」世代としての典型的な存在を表象しているともいえよう。

なお、この短篇では登場人物が「彼女」「彼」といった代名詞で呼称されているが、そこには、「僕」にとって個人的な出来事でありながら、登場人物に世代的、時代的な特異性を表象させようとする意図も潜在しているのではないだろうか。

### 三 アルジェリアの意味

ここで「彼女」が「二年前の春」、すなわち一九八〇年の春に訪れたアルジェリアについて検討しておきたい。

一三〇年以上にわたりフランス植民地下にあったアルジェリアは、七年以上にわたる独立戦争後の末、一九六二年三月に独立を宣言し、アルジェリア民族解放戦線 (FLN) を唯一の政党とする社会主義国家となる。ちなみに、独立戦争の苦闘についてはジッロ・ポンテコルヴォ (Gillo Pontecorvo) 監督による映画『アルジェの戦い』(原題『La battaglia di Algeri』イタリヤ＝アルジェリア合作 一九六六) が民衆による抵抗の生々しい実情を余すところなく伝えている。

独立後は、サハラ石油、天然ガスをもとに重化学工業化を進め、地中海沿岸諸都市には最新設備の工場が建設された。独立戦争中から日本の有志によってFLNへの医療援助をするなど日本とは友好関係にあり、独立後は日本に

対しておもに工業製品やプラントを輸入し、天然ガスや原油を輸出している。日本の技術に対する信頼が高いため、アルジェリアは日本にとつても一九七七年度プラント輸出相手国の第一位となっている。

このようにアルジェリアは、政府や企業主導の経済活動においても市民による「F」支援活動においても日本との関係が良好であったことから、「彼女」が「僕」のアルジェリア大使館の知り合いを通してアルジェリアに旅立ったのも不自然なことではない。一九七〇年前後のアルジェリア在住の日本人が二〇人ほどだったのに対し、一九八〇年当時はプラント施設の事業に携わる日本企業の社員等により五〇〇〇人を超え、日本人学校も設立されていた。<sup>(14)</sup>一方で、ちょうど一九八〇年の春には、石油依存の経済政策をとったシャド・ベン・ジュデイド大統領政権に対し、ベンベル語による表現の自由を求めたアルジェリアの学生運動「ベンベルの春」が起こった時期にも当たり、日本でも新聞で大きく報道された。また、石油プラントの建設に際し、自然と人為双方の困難や危機に直面した日本企業の関係者のアルジェリア情勢に関する報告もあり、アルジェリアは決して安全な地域とはいえない状況であったことがわかる。<sup>(15)</sup>

一九八〇年の春から夏にかけて、こうした状況のアルジェリアで「彼女」と出会う。「二十代後半で、背が高く、すきのない身なりをして、丁寧な言葉づかい」をする「彼」は、「貿易の仕事」をしており、「バイルートの治安状態やチュニスの上水道の話」をし「北アフリカから中東にかけての情勢にはかなり詳しい」存在であった。会社や組織に所属しているとは思われない「彼」は、そのような地域で「貿易の仕事」をし「情勢にもかなり詳しい」ことから、個人が複数単位で活動するブローカーのような活動をしていた可能性が高いと推測される。特に、地域的な特徴からは、武装地域や紛争地域では武器にも改造された日本車の中古の取付けや輸出も考えられるが、アルジェリアの産業事情を勘案すると、もっとも可能性の高いのは石油関連の仕事として日本への石油等を仲介するブロー

カーである。一九八〇年六月には、第二次オイルショックを受けてOPEC関連の産油国がアルジェリアの首都アルジェに一同に会してその対応を検討する「アルジェ総会」も開かれている。「彼」が原油の先物取引やスポット買い、あるいは闇取引などブローカーとして活動していたとすれば、一九七九年に始まる第二次石油ショックによる石油価格の高騰によって相当の富を手に入れることができたはずである。一九八〇年の夏に「彼女」とともに帰国するのも、「彼」にとってははぶりがよい時期に当たっていたのではなかったか。二〇代後半で恐らくはダイムラー社のメルセデス・ベンツだと思われる「しみひとつない銀色のドイツ製のスポーツ・カー」に乗っているのも、「彼」の仕事が活況を呈していたことを物語っているように。

ちなみに、一九七九年六月一日付『朝日新聞』に掲載された「ロッテルダム市場 スポット高騰で脚光 ブローカーが暗躍 過熱…取引量つかめず」と題する記事では、「イラン革命に端を発した原油共有不足から、このロッテルダムで決まる原油及びガソリンを中心とする石油製品のスポット買い（当用買い）価格が一バレル四〇ドルちかくにも異常な値上がりをもせた」とあり、「ロッテルダムでは石油製品のスポット価格を決める大小のブローカーが暗躍している」と報道している。また、一九八〇年八月五日付『朝日新聞』では、「黒い霧の中の商社国際取引 ワイロヤリベート、常識とか」と題する記事で、石油産油国、プラントの輸出国との双方において、ブローカーの介入によって賄賂やリベートが行交うことが常識となっていることが報道されている。<sup>(16)</sup>

ところが、一九八一年以降、イランの石油販売再開等などにより、石油価格がだぶつきはじめる。その影響は「彼の収益にも大きく関係してきたと思われる。実際、翌（一九八二）年の一二月に「僕」が「彼」と再会した際には、「彼のスポーツ・カーは「左のヘッド・ライトのわきに小さな傷がついて」おり、「以前見たときほどびかびかと鮮やかに輝いてはいなかった」と描写されている。これは「彼」による「彼女」殺害を暗示する描写だとも解釈できるが、



一方で、石油価格の下落傾向によって「彼」の仕事が以前よりも上手く立ち回らず、収益悪化の状況を端的に物語っていると解釈することも可能ではないだろうか。いずれにせよ、一九八〇年一〇月に「僕」の家に訪れ、大麻を吸いながら「僕は世界のほとんどあらゆる場所に行きました。あらゆる経験をしました。何度も死にかけました。自慢しているわけじゃありません。」と述懐する「彼」は、取引や買付け、仲買などを通して、場合によっては不法行為や悪質な手法を取らざるを得ない事態に直面することも少なくなかったはずである。とすれば、情勢の不安定な地域で拘束されるなど危険な目にあったり、民族紛争の激化によって生命に関わる恐怖体験したり、闇取引などによって暴力的な世界に接したりしたことも想像されよう。

「彼」は、小説家の「僕」に、モラリティーについて以下のように語る。

「僕は僕なりにモラリティーというものを信じています。それは人間存在にとって非常に重要な力です。モラリティーなしに人間は存在できません。僕はモラリティーというのはいかなれば同時存在のか、ね、あ、いのことじゃないかと思うんです。」

「同時存在？」

「つまり僕がここにいて、僕があそこにいる。僕は東京にいて、僕は同時にチュニスにいる。責めるのが僕であり、ゆるすのが僕である。たとえばそういうことです。そういうか、ね、あ、いがあるんです。そういうか、ね、あ、いなしに、ぼくらは生きていくことはできないと思うんです。それはいわば止めがねのようなものです。それがないことには僕らはほどこけて文字どおりばらばらになってしまいます。それがあればこそ、僕らの同時存在が可能になるんです。」

この会話には重要な意味が込められているのではないだろうか。「彼」としては、いわば一九八〇年代の繁栄する

平和な日本と情勢が不安定で貧富の差も激しく暴力や民族対立などが激化している地域とを往還する中で、自分の仕事を闇の領域で完遂するためには、精神的なバランスをとるのが非常に難しかったと想像される。「彼」の言葉は、自責の念と自分を許すこと、生と死、正当と不正、正義と悪のバランスなど、いわば光と闇のバランスをとることへの必死な思いが吐露されているともいえる。そして、日本と何もかも正反対の地域に身を置くことの不安や自問を封じ込めるため、あるいは自己の活動に対する正当化や自身の尊厳を保守するために、何らかの代償が要請されざるを得ないことを意味していよう。山根由美恵も「自分自身を維持するために、無意識の領域にある闇の部分を消去するということになる<sup>17)</sup>」と指摘しているように、「彼」が△納屋を焼く▽のは、自分だけでは抱えきれない精神的緊張や精神的外傷を補完し、自身を維持しようとするための闇の行為だと思われる。

だが、これは、「彼」だけの個人的な問題なのだろうか。代名詞で語られる「僕」や「彼女」が世代的な立場を暗示しているとすれば、「彼」も同じくそうした立場を暗示しているともいえよう。いわば不特定多数の「彼」が日本の外部で類似した「仕事」や「活動」に携わり危険にさらされ恐怖を体験していたとも考えられる。だとすれば、多くの「彼」が、日本と往還する中東や北アフリカなどの地域は、まさに「彼」に「同時存在のかねあい」を要請せざるを得ないほどに経済的にも治安的にも風土的にも隔たった場所だといえるだろう。日本に住んでいる限り、一般的には可視化されにくいこうした諸相が多数絡んでいるからこそ、一九八〇年代の日本は繁栄を維持できているのだともいえる。とすれば、「彼」の述懐する「同時存在のかねあい」としての「モラリティー」は、そのまま時の日本を代弁するものともいえるのではないだろうか。

## 四 日本赤軍の影

しかし、アルジェリアが示唆するものは、それだけではないと思われる。

「彼女」が旅立つ三年前の一九七七年九月二八日には、ダッカ日航機ハイジャック事件が起きており、ボンベイで日本赤軍にハイジャックされた機体は最終的には同年一〇月三日にアルジェリアに着陸している。この事件については連日、テレビや新聞で報道されたが、事件から数年を経た一九八一年七月二二日付『朝日新聞』でも、「ダッカ組と共に行動 日本赤軍 重信房子と中東で会見」といった記事が写真入りで掲載されている。周知の通り、重信房子は日本赤軍の元最高幹部であり、当時はパレスチナ解放機構（PLO）やパレスチナ解放人民戦線（PFLP）などと連携し、武装勢力として左翼運動による世界革命を目指して、レバノンなどを拠点に活動していた。<sup>(15)</sup> 日本赤軍の二〇人を超えるメンバーはほとんどが一九四五年～五〇年生まれで、一九八〇年には三〇代になっており、小説家の「僕」と同世代であることは注目に値する。「僕」が抱く「わけのわからない人間が抱くわけのわからない思想のこと」には、こうした一九六八、六九年の学生運動の流れを組んだ日本赤軍の一九七〇年代における中東での過激な活動への疑念も示唆されているのではないだろうか。実際、「納屋を焼く」の時代設定に通じる一九八〇年代前半に入っても、日本赤軍についての中東での動きを伝える新聞記事を散見することができる。

「納屋を焼く」の冒頭では、「彼女」の「蜜柑むき」を見た「僕」は次のように述懐していた。

だんだん僕のまわりから現実感が吸いとられていくような気がしてくるのだ。これはすごく変な気持ちだ。昔アイヒマンがイスラエルの法廷で裁判にかけられた時、密室にとじこめて少しずつ空気を抜いていく刑がふさわしいと言われたことがある。どんな死に方をするのか、くわしいことはよくわからないけれど、僕はふとそのことを思い出した。

「僕」は「現実感が吸いとられていく」感覚に対して「アイヒマンがイスラエルの法廷で裁判にかけられた時」の刑のことを連想する。「蜜柑むき」のバントマイムをする「彼女」とアイヒマンの裁判との組み合わせはいささか唐突な印象を受けよう。だが、ここで引き合いに出される「イスラエルの法廷」とは、日本赤軍のメンバーである岡本公三が一九七二年五月二〇日に仲間二人とテルアビブ空港乱射事件を起こして逮捕され、イスラエルで裁判を受けた事態を彷彿させるのではないだろうか。なぜなら、「イスラエルの法廷」において、岡本があくまでも組織のための行動原理を主張し民間人の犠牲者に対する謝罪をしなかった姿勢<sup>(19)</sup>は、ハンナ・アーレントの報告でホロコーストを指揮した行動原理を詳細に知ることのできるアイヒマンと共通する態度だからである。「僕」の「イスラエルの法廷」の連想には、ナチス・ドイツのアイヒマンから日本赤軍を暗示するルートが示唆されているともいえる。

「納屋を焼く」には、アルジェリア、レバノン、ベイルート、イスラエル、チュニスといった中東から北アフリカにかけての地名が登場するが、これらは先述したように、繁栄する日本と経済的に密接な関係のある石油産出国関連の地であると同時に、実は、当時はまだ読者にとっても記憶に新しい一九七〇年代の、数度にわたる中東や北アフリカに関連したテロ事件によってメディアをにぎわせた日本赤軍の足跡を想起させる地でもあろう。

一九八〇年前後に二〇代を迎えた「彼女」のような新しい世代は、高度消費社会を迎え経済的にも物質的にも豊かなとなった日本で暮す限り、一般的に中東や北アフリカでの出来事や国際情勢とは無縁に思えよう。だが、学生運動の時代を経た世代にとっては、一九七〇年代以降、日本から逃亡しパレスチナ解放機構の傘の下で武装活動を継続した日本赤軍の一連の出来事を黙殺することは難しかったのではないだろうか。「僕」が「わけのわからない人間の抱くわけのわからない思想のこと」に拘泥するのも、こうした事態への何らかの意識が働いていたと思われる。

## 五 光と影を描く春樹のスタンス

一九七九年、「僕」と「彼女」は結婚パーティーで出会った。その「彼女」は不定期ながら「広告のモデル」をしていた。翌年、「彼女」が「彼」と連れ立って「僕」の家を訪れた際には「ロースト・ビーフ・サンドウィッチとサラダとスモーク・サーモンとブルーベリー・アイスクリーム」を持参し、「量もたっぷりあった」と語られている。彼らはレコードを聴きながらワインを空け、冷蔵庫に「いつもぎっしりつまっている」缶ビールを飲む。いずれも高度消費社会が一九八〇年代以降に都市部を中心に拡大していった日本の現状を端的に物語っている。だが、豊かな日本とはほぼ地球の裏側に対置する中東や北アフリカの地域では、石油を中心とした資源をめぐり、民族紛争、独立戦争、イラン・イラク戦争（一九八〇）などの火の粉をかいくぐって、石油プラントの建設や価格交渉をする企業や、その隙間で暗躍する「彼」のような仲介者の動向が厳然と存在していた。日本の繁栄にはこうした営為が背中合わせに張り付いている。それはまさに「彼」のいう「僕らは生きてくことはできないと思うんです。それはいわば止めがねのようなものです。それがいいことには僕らはほどこけて文字どおりばらばらになってしまします」という事態に喩えられよう。加えて、これらの地域には、学生運動の時代を二〇歳前後で過ごした「僕」と同世代の日本赤軍が、パレスチナ支援を名目に武装組織として活動し様々な事件を起こしていた。とすれば、アルジェリアにはじまる一連の地名設定は、一九八〇年代の平和な日本に対する見出し得ない影の部分として意識的に導入されたということになるろう。

「彼」の「納屋を焼く」ことが具体的にどのような行為を指しているのかは、小説の描写からは特定できない。だが、「彼」の発言内容に基づく行跡からすると、「彼女」の失踪には明らかに「彼」が関与しているよう。まず推測されるのは、「彼」が平和な日本での日常と危険な世界での闇の行動との間で自己の精神的なバランスをとるために、殺人行

為に至るといふ見方である。

だが、「納屋を焼く」が一九八〇年代前半の日本と中東や北アフリカとの表裏関係を暗示するとすれば、「彼女」の失踪も当時の日本の現状の一端を表象しうるとも受け止められよう。たとえば『朝日新聞』の記事データベースによれば、様々な拉致事件が社会問題として浮上するの一九七〇年代後半から八〇年代前半にかけてであった。ちなみに日本赤軍の欧州での事件の一部は北朝鮮の拉致問題との関連も疑われていた。一方では新興宗教の「イエスの方舟」が集団女性失踪事件を起こしたのも一九八〇年のことである。また、一九七八年～八四年までが戦後の半世紀の日本において行方不明者総数一〇万人を超えるピークとなっており、そのうち八一年までは女性の行方不明者が男性を上回っていた。<sup>(21)</sup>だとすれば「彼」の△納屋を焼く▽行為は、たんなる殺害とは限定できず、失踪の手引きなどをした可能性も考えられよう。

「彼女」の失踪と△納屋を焼く▽というメタファーには、こうした当時の日本における社会的事象との関連性も想起されるが、作品内からは「彼女」の失踪（または死）の内実を具体的には特定できない。だが、できないからこそ、一九八〇年代前半の日本の闇の部分、繁栄の影に潜む病んだ部分として、その疑惑を示唆して止まないのではないだろうか。

パントマイムを勉強し友人に食事をおごってもらう「彼女」は「あけっぴろげで理屈のない単純さ」を備え、「そこに蜜柑がないことを忘れればいい」というように、いわば社会的実情から逸脱し社会的帰属に拘束されない存在にあった。申恵蘭が「それは、反社会的な出来事として非難されるべきことではなく、むしろ、その逆、現実不適応者に見えることにこそ「彼女」の存在の意味があるのではないか」と指摘する<sup>(22)</sup>ように、本作は「現実不適応者」によってこそ、一九八〇年代の日本社会が反照されてくるといえよう。石油資源を前提に大量生産、大量消費を標榜す

る一九八〇年代の資本主義社会のシステムという観点から見れば、非生産的存在である「彼女」は無用となりつつある「納屋」にも喩えられる存在である。高度産業化社会を迎えた当時の日本は離農者による農業の衰退が著しく、「僕」が毎日走って通り過ぎる「燃えて差し支えない納屋」は、いずれも農業から見捨てられた存在であった。対して、フォークナーの「納屋を焼く」の納屋は、貧農家族の父親が農民から搾取する地主階級に対する恨みとして放火を繰り返すのだが、それらは薪や干し草がつめられている大きな納屋であり、燃やされては農家にとって大きな打撃となる必要不可欠な存在であり、本作とは対照的なものである。

資本主義のシステムに寄生して利鞘を得る「彼」は石油という現代社会における生産と消費の大本に携わり、「彼女」とは対極に位置する。だが「僕」は、システム社会を軸として見れば両極にある双方と対話し、「彼女」の善良さには安堵を得、「彼」からは「同時存在」や「納屋を焼く」話を聴くポジションにいる。「納屋」を实体として受け止め、毎日自分の足で走り続ける「僕」の役割は、双方を受容しうる上での重要な与件なのである。

「納屋を焼く」という短篇は、小説家の「僕」が出会った「彼女」と「彼」との奇妙な体験を回想した作品である。だが、時代背景や地理的設定、登場人物の世代や仕事を総合的に分析すると、「ここ」である日本が、「あそこ」という裏側の世界との「か、ね、あい」によって存在していること、つまり、中東や北アフリカの石油（と第二次石油ショックの動向）、日本を離脱した日本赤軍の活動、報道される失踪事件等、一九八〇年代の日本の物質的な繁栄に潜在する不即不離のもう一つの疑惑的存在が常に日本に何らかの影を宿してくることを示唆しているよう。「納屋を焼く」は一九八〇年代の日本の光と影を表象するテキストだといえる。

だとすれば、この短篇は、時事的、社会的な事情を背後に潜ませつつ、同時代の読者のみならず後代の読者全般に對し自らの足場を参照させる光の魅惑と影の疑惑を秘めた「ものすごくひやっとした小説」を提示したことになろう。

こうした時事的、社会的要素を取り入れた春樹の創作意図は、他の初期短編にも連なる看過し得ないスタンスといえるのである。

注

- (1) 村上春樹「自作を語る」短編小説への試み」(『村上春樹全作品1979～1989』第三巻 講談社 一九九〇・九)
- (2) 山根由美恵「二つの「納屋を焼く」——同時存在の世界から「物語」へ——」(『広島大学大学院文学研究科論集』二〇〇九・一二)
- (3) 田中実「消えていく△現実▽——『納屋を焼く』その後『パン屋再襲撃』」(『国文学論考』一九九〇・三)
- (4) 酒井英行「△分身▽たちの呼応」(『国文学解釈と鑑賞』別冊『村上春樹 テーマ・装置・キャラクター』二〇〇八・二)
- (5) 川本三郎「『淡さ』の意味」(『文学界』一九八四・一〇)
- (6) 加藤典洋「村上春樹の短篇を英語で読む 第7回 強奪と交換——パン屋再襲撃(前編)——前期短篇の世界 その2」(『群像』二〇一〇・三→『村上春樹の短篇を英語で読む 1979～2011』講談社 二〇一一・八)
- (7) 平野芳信「構造と語り——村上春樹『納屋を焼く』をめぐる試論——」(『日本文芸の系譜』笠間書院 一九九六・一〇)
- (8) 村上林造『変身放火論』(講談社 一九九八・一〇)
- (9) 西田谷洋「虚構のモラリティー——村上春樹『納屋を焼く』論——」(『国語国文学報』二〇一二・三)
- (10) 竹内理矢「フォークナーから村上春樹へ——『納屋』への放火、「父」あるいは「母」とのはざま——」(『群系』



二〇一四・七)

(11) 注(1)に同じ。

(12) 注(6)に同じ。

(13) 『日本国語大辞典』第二版(小学館 二〇〇〇・一一)

(14) 宮治美江子「アルジェリアから見たアラブの民衆革命―独立50周年目を迎えたアルジェリア訪問から」(『IIEET通信』(Bulletin of Institute of International Exchange, Tokyo International University)) 第四六号 二〇一三・一二)

(15) たとえば、当時、日本揮発油株式会社の社員であった重久吉弘は「私の履歴書12 アルジェリア 三〇〇〇億円 巨大事業に挑む」(『日本経済新聞』二〇一五・一二・一二)において、アルジェリアでの一九七六年から着手した石油プラント建設について「強烈な日射、感想、高温に加え、砂嵐、強風―。作業環境はそれまでの日揮のプロジェクトでもっとも厳しかった。」と回想している。

(16) なお、こうした当時の事態に関して、岩瀬昇は『石油の「埋蔵量」は誰が決めるのか―エネルギー情報学入門』(文藝新書 二〇一四・九)において「昨今、法規や社会通念に合致した行動を取るとは企業の基本行動原則になっている」とし「現代においては『不毛地帯』のような産業スパイもどきの情報収集活動はできない」と述べている。

(17) 注(2)に同じ。

(18) これについては、重信房子『日本赤軍私史 パレスチナと共に』(河出書房新社 二〇〇九・七)で詳細を知ることができる。

(19) パトリシア・スタインホフは、岡本公三に対するイスラエルの刑務所でのインタビューを『死のイデオロギー』

日本赤軍派』(河出書房新社 一九九一→岩波現代文庫 二〇〇三・一〇)に掲載しているが、そこでも岡本は、組織の行動原理に則り、謝罪の必要を述べている。

(20) ハンナ・アーレント『イエルサレムのアイヒマン』(大久保和郎訳 みすず書房 新版一九九四・一一) 参照。

(21) 「平成二五年中における行方不明者の状況」(警察庁生活安全局生活安全企画課 二〇一四・六)の付属資料「年次別行方不明者届受理状況」による。

(22) 申恵蘭「納屋が消える世界―村上春樹『納屋を焼く』論」(『法政大学大学院紀要』二〇〇九)